

大学卒業後、国立国際医療研究センター病院から初期研修を開始、
ロンドン大学衛生学熱帯医学大学院で修士号を取得、
社会的に弱い人たちも健康的な生活を送れる支援を目指す医師

ほんだ まり 本田 真梨

国際医療協力局
連携協力部 展開支援課
医師



★略 歴

- 2011 名古屋市立大学医学部卒業
国立国際医療研究センター病院 初期臨床研修医
- 2013 国立国際医療研究センター病院 小児科国際臨床レジデント
- 2017 国立国際医療研究センター国際医療協力局 入局
ロンドン大学衛生学熱帯医学大学院修士課程修了（～2018）
- 2018 国際医療協力局 復職
- 2020 産休・育休
- 2021 JICAセネガル母子保健サービス改善プロジェクトフェーズ3長期専門家

★現在の主な担当業務

保健システムチーム
JICAセネガル母子保健サービス改善プロジェクトフェーズ3長期専門家

——— 本田さんが、医師を目指したきっかけを教えてください。

小さい頃に“人はなぜ生きて死んでいくのか…”と、疑問に思ったことが医療に興味を持ったきっかけだと思います。母が小学校の特別支援学級の教師をしていたことや、祖母が点訳や音読のボランティアをしていたことから医療・福祉に関する話題に触れる機会が多かったのかもしれません。本を読むことが好きな子どもだったので、読んだ本の中で病気や障害に関わらず力強く精いっぱい生きる人たちの姿に感動し、このような人たちの手助けができる仕事に就きたいと思うようになりました。保健医療に関わる仕事が多様にあるとは知らなかったこともあり、単純に医師ならいろいろなことができそうだと考えて、医師を目指しました。

———**本田さんは初期研修から、ずっと国立国際医療研究センターなんです。**

興味のある国際協力と保健医療を両方できる仕事がしたいと考えて、まずは医師を目指すことにしたのはいいものの、どのような形で途上国の保健医療に貢献できるのか具体的なイメージがわからず、卒後10年ぐらい臨床経験を積んで一人前になったら現場で直接医療を提供している大手国際NGOに応募するようつもりでいました。大学5年生の春休みに、たまたま参加したスタディーツアーで公衆衛生的なアプローチがあることを知り、このような形で国際保健医療協力に関わりたいと考えました。国立国際医療研究センターには、小児科の後期研修3年間のうち1年間の国際医療協力局での研修を組み合わせた小児科国際臨床レジデントコースがあると知って興味を持ち初期臨床研修から国立国際医療研究センターで働くことに決めました。小児科国際臨床レジデントとしての国際医療協力局研修では、主にセンター病院小児科と国際医療協力局が合同で実施していたカンボジア国立母子保健センターの新生児医療ミニプロジェクトを担当しました。また2016年には、世界保健機関（WHO）のカンボジア事務所で小児結核に関するインターンを3か月しました。インターン期間中に麻疹のアウトブレイク疑いが起きたため、予防接種プログラムの支援としてMRワクチンキャンペーン後のカバレッジ調査にも参加しました。



**カンボジア国立母子保健センターでのレジデント研修時代。
NCGMセンター病院小児科と国立母子保健センター新生児科の
テレビカンファレンス**

———**国際保健医療協力の分野に入るきっかけについて、聞かせてください。**

父の仕事の関係で4歳から10歳までマレーシアのパナン島で暮らしました。その時には近隣の途上国を訪れる機会も多くありました。同い年ぐらいの子どもが大人に連れられて道端で物乞いをする姿をみて「どうして?」と思ったことを覚えています。また日本に帰国して成長するにつれて、メディアや本を通じて、世界の国々の中には貧富の差が大きい国があること、また紛争や自然災害により人々の命が危機にさらされている地域が多くあることを知りました。将来は場所が日本であれ、世界であれ、このような最も困っている人たちの手伝いができるような仕事がしたいとずっと思っていました。



国際医療協力局に入職した理由を教えてください。

後期研修後に、改めて国際保健医療協力の道に進もうと決めた時、まずは指導者がいる環境で経験を積める場所を探しました。また国際保健医療協力に取り組み始めるにあたり、グローバルな潮流や他の国々について深く知ると同時に、日本の現状も客観的に見つめ直したいと思い、まずは日本に軸足を置きたいと考えました。

国際医療協力局には経験豊富な方々が多く在籍しています。また厚生労働省をはじめとした日本の行政や、日本の政府開発援助実施機関である国際協力機構（JICA）との繋がりも深く、研修事業や研究など、業務の幅が広いです。多種多様な仕事を経験できるチャンスがあると考えて応募しました。

入局後には集団研修のコースリーダー、国際会議へのオブザーバー参加、JICA短期専門家などを担当しました。



**課題の提出に向けて学校の図書館で
クラスメイトと一緒に勉強**

国際医療協力局で、これからどのような仕事をしたいと思っていますか？

私は障害者、高齢者、子ども、女性、移民・難民、低所得者など、vulnerableな人たちが、その他の人たちと同等に健康的な生活を送る支援ができる仕事がしたいと考えています。昨年英国に留学した時には、Global health and disabilityという科目を受講し、主にアカデミアからどのように障害者支援に取り組むことができるかを学びました。また、国際都市・ロンドンで、多国籍で多様なバックグラウンドをもつ友人たちと共に学んだ経験を通じて、移民・難民やジェンダーなどの分野の課題について、より広い視野で考えられるようになりました。vulnerableの人たちの健康課題に対して、これまでの医師としての経験を生かしながらどのような取り組みができるのか、模索しているところです。まだ十分に研究が行われていない分野も多く、エビデンスをつくり出すための研究能力を身につけるために、博士課程への進学も検討しています。まずはどんな仕事においても、常にvulnerableな人たちの声に耳を傾ける、寄り添って仲間になるという姿勢で取り組んでいきたいと思えます。



**入局して最初の出張は、第70回世界保健総会。
展示されていたSDGs [Goal3] のパネルの前で。**

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

働いている場所が国内・国外に関わらず、広い視野をもって人々の健康向上に取り組むことが大事だと思います今は医療職の働き方の多様性も認められてきており、これまでの国際医療協力にとらわれない柔軟な発想が求められているように感じます。まずは一歩、踏み出してみてください！

ありがとうございました。



～入局後の学び～

2018年に留学を終えて国際医療協力局に復職してからは、短期の仕事を中心に多様な業務を経験しました。特に印象に残っている業務が2つあります。

1つはWHO西太平洋地域事務局(WPRO)の早期新生児必須ケア活動支援の短期コンサルタントです。以前よりWPRO担当課に出向していた局員につないでいただき、折に触れて関わっていたプログラムでしたが、この業務によって、実際の医療従事者レベルから、国の指標やガイドライン等を策定する国レベル、さらに地域全体の計画を策定し、進捗管理・支援する地域レベルまで、1つのプログラムを多面的に知ることが出来ました。

もう1つは厚生労働省の「医療技術等国際展開推進事業」に関する仕事です。本事業には企業が多く参加しています。企業の事業運営のあり方や着眼点を知ることが、これまで医療従事者としての視点や、国際機関やODA等の公的セクターとしての視点に偏っていた自分の視野を広げるよい機会となりました。

現在は海外長期派遣中ですが、日々現場から学ぶことばかりです。これまで学んだことも存分に生かしながら、相手国に貢献したいと思います。